

# 生と死の交感

インタビュー特集

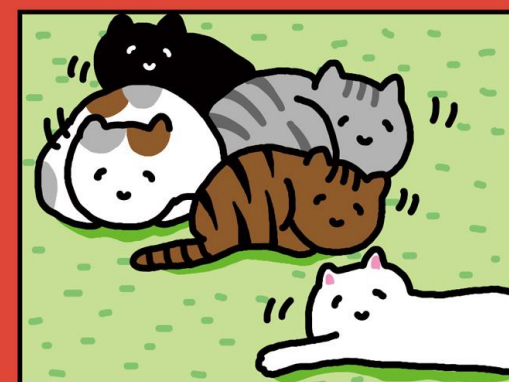
ホスピタリティ

vol.1  
創刊号  
Take Free

生き方をキュレーションするフリーマガジン

ホスピタリティ  
能楽師 吉村規男  
美術家 伊東宣明

連載 小山田 徹  
漫画 アストロ温泉



ねこの一日



くまの一日

表紙絵 **とんぼせんせい**

とんぼせんせいは三本の線を引くだけで、どこにでも現れます。  
人物、動物、風景、プロダクト、、、  
全てのものがとんぼせんせいに變化し、広まっています。  
何度も見るうちにジワジワと浸食するイメージハッカー。  
とんぼせんせいの笑顔 トゥザワールド!

# Contents

## インタビュー特集 「生と死の交感」

「生きる」ということを「死」という側面から考えてみる。  
今回は、何かしらの形で「死」と関係を持つところで活動する3人に焦点を当てます。

03. ホスピスボランティア 吉村 規男

05. 能楽師 味方 團

08. 美術家 伊東 宣明

10. 連載漫画 **怪獣小学生えい子**  
アストロ温泉

12. 連載コラム **開かれた場のための4つのレシピ**  
小山田 徹

15. 編集後記

誰もが感じるような、ちょっとした疑問。

よりよく生きる、豊かに生きる、とは一体どういうことなのでしょう？

社会が提示するライフスタイルは、本当に人間に適したものなのでしょうか？

顔を上げて、周りを見渡せば、そこにはいろんな生き方がある。

いろんな切り口があり、いろんな試みがある。

どれもみんな、同じ時代に生きる人の営みです。

現代の「生き難さ」と向き合い、それを乗り越えていくために。

ちょっと寄り道、してみませんか。

生き方を考えるフリーマガジン「ON THE EDGE」

創刊します。

編集長 / 美術家 河村啓生

## ホスピスでボランティア活動をされる、吉村規男さん ホスピスに何があるのか、ボランティアの動機や意義について聞いてみる



### ホスピスボランティア 日本病院ボランティア協会理事長

# 吉村 規男

よしむらのりお

というか亡くなられるわけですよ。でも亡くなられたとしても、繋がっていると書いています。現実にお話ができるのかそういうことじゃないですけども、この世からはなくなつたとしても、それおしまいという思いはありません。なので、そのことに対する恐怖とか、そういうものはあまり感じませんね。それはさっきの話に戻るようですが、浄土真宗の考え方が影響しているのかな、とは思っています。

吉村さんは「いぶん長く続けておられると思いますが、続けることと見えてくるものとか、ボランティアをやり続ける意味というのはどういふところにあるのでしょうか？」

基本の業務は同じかもしれないけれども、日々違いますから。私は次の五月が来て丸十年になります。かっこよく言えば毎回新鮮ですね。それに終末期の生き様というところでは、いろいろの人がそれぞれの生き様をしています。十人おられたら十人十色。やっぱり多くの方と接することで、いろんな面が見えてくることはあると思います。でも今日はこういう生き様が見えただと聞かれたら、具体的な言葉にはならないです(笑)。災害ボランティアなら、この瓦礫を片づけたとか明確な指標がありますが、ホスピスでの活動の結果は目に見えない部分が多い。その分は、イメージとか、心の中でやり取りしているか、そういうことと得るものがある、ということですね。

社会で死や病、老いというのは嫌厭されがちです。ね。一方でホスピスはそれらを自然なものとして受け入れるところから始まっています。吉村さんは、それらとどう向き合っているのか、と考えておられますか？

世の中で言われているほどには、ネガティブなものだとも思っていない。さっきも言ったように、やがて私も行く道であると。だから患者さん方を特殊な経験をされている方だとは決して考えていません。世の中で一番確実なことは、自分が死ぬことでしょう。その事実は自分の中にすんと落ちていくと、私自身は感じていきます。わたしはもう、父、母、祖父、祖母、みな亡くなって送っていますから、それだけの生き様、死に様を通して学んだものも多い。こんどは自分がそういうものを如何に次の世代に見せていくか、そういうのが務めとしてあるのかな、とは思っています。ただ、それでもいざ死が近づいたときにはじたばたするかもしれないですね(笑)。

いまのお話と重なるんですが、ホスピスボランティアや社会に対して、今後どうしていきたいというふうなものがありますか？

ホスピスが暗いイメージのある死に場所ではなく、人生の最期を充実させる場所というところは伝えたいですね。そしてホスピス、緩和ケア病棟のような場所が増えれば良いなというところは思っています。ただ、自分が受けている透析が既に延命治療じゃないかと言われることもあるので、微妙な問題をはらんでいますが…。あと病院ボランティアの意味というものを、もう一度みなさんと考え直

まず、なぜホスピスボランティアになられたかという動機についてお聞きしたいですか？

はい。もともと腎臓を悪くして透析にかかっていたら、それが生き死にのことについて考えるきっかけになりました。

それは実際、命に係わるほどの病だったのですか？

わたし流に言っているのは「死の二歩手前」という状況でしたね。透析をしないと、一週間から十日であの世行きになる。そういう状況で、現在も透析という治療技術で命を長らえています。いまのホスピスに関わるようになったのは、当時、その病院の講演会の案内を見て、それを聞きに行ったんです。それまでは、ホスピスのことは知っていただけでも、直接は関わりなかった。そのときお手伝いしていたボランティアさんを見て、また講演会での病院の説明だとかを聞いて、衝撃を受けたんですね。仕事を続けるよりも、ホスピスでボランティアをして過ごすのが、これからの人生にとって、よりふさわしいだろうと感じたことが始まりでした。

ホスピスのような死に近い場所に身を置くことに抵抗感を感じられる方も多いと思うんですけど、それに対する迷いみたいなものはなかったですか？

それは全然なかったですね。病気のこともあつたし、我が家が浄土真宗の西本願寺の系統で、そういう宗教関係の話とか本も若いころからいろいろ読んでいました。だから今の世の中では「死が遠い」なども言われますが、そういうことはなかったんですね。もともと若いころはまだまだ理屈で死を考えていました

が、病気を通して、より身近に死というものを感じるようになりました。

いままで漠然としてた「死」というものが、すごく実感を持って迫ってきたんですね。

そうですね。透析を始めてしばらくして文章を書いた時にも、「自分は透析に行き返るんだ」と書きました。ある種、死の疑似体験をして、生き返って、また透析までの間生き続けていると。そういうサイクルで、透析というものを捉えていましたね。

次の質問になるんですが、いま吉村さんにとってホスピスとはどういう場所でしょうか？

そうですね…。かっこよく言えば「自分を高められる場所」、もう一度ピエラになれる場所、という感じがありますね。入院をされている方は終末期の方が多いわけですが、ご家族も含めて、元気を貰って帰っています。初めに持っていたイメージとは全然違って、ホスピスというと一般的には暗いイメージですが、持たれがちですが、そういうことはありません。むしろ我々が、そしてわたしが、活動を通してパワーを貰っている。逆にね。何かを「与える」んじゃなく、「貰って」帰っています。また患者さん方は、やがて私も進むべき道を進んでおられる方だと私は捉えていますので、そういう方の「死に様」ではなくて「生き様」を見ることで、精神的に高められるということもあります。親しくなった患者さんが亡くなられることも起ると思いますが、つらくはないですか？

極端な話をすると、誰でも最終的には退院

↓ 病院内でティーサービスの準備をする吉村さん



## 吉村 規男 よしむらのりお

1950年9月16日生まれ(現在63歳)

2003年3月京都府立高等学校教諭を退職し、同年5月よりホスピスボランティアを開始。

現在はホスピスでのティーサービスボランティアを行っている。2007年11月、

日本病院ボランティア協会理事に就任すると、2013年11月より同協会の理事長となる。

クラシック音楽鑑賞やオーボエ演奏を趣味に、現在もボランティア活動に意欲的に取り組んでいる。

注釈:ホスピスボランティアとは

ホスピス、緩和ケア病棟において、一般の人々によって行われるボランティア活動のこと。病院によって活動や趣旨に違いはあるが、病院内での日々を生活者の視点に立って充実させ、患者、家族にとってより良い環境を提供することを目的とする。医療行為以外での医療者の補助が含まれることもある。具体的な活動の例としては、病院内での喫茶サービス(ティーサービス)やイベント補助、ガーデニングや縫製業務などが挙げられる。



武家社会の死生観を色濃く残す「能」を継承する、味方團さん  
 現代的な意義や魅力を能楽師に聞く



能楽師 京都親世流 シテ方

味方團

みかたまどか

いれはいんです。そこに真っ白な気持ちで身をおけば、何か見えてくる。それで終わった後に、「何やったんやろ？」でいいんですよ。

そこに答えがあるんじゃないかと、持ち帰って考えられるような時間なんです。そうした能が内包している、現代にも通じる精神性は何なのでしょう？

根底にあるテーマは何なの、っていうたら、それこそ魂の救済と反戦なんです。救われたい人間の感情というのがすごく根底になる芸能なんです。例えば、平敦盛という人は戦が嫌いで、笛ばかり吹いてた。でも、武将の子に生まれたから戦をしなければいけないって出て、初陣で討たれてしまった。討たれようとは

いうと、首をとってみたら自分の子ぐらいの子やったわけで良心の呵責にたえられへんかった。それで武将をやめて出家して、敦盛を弔うようになったわけです。だから、戦争なんてやっばいって一個もないのよ、っていう反戦のお話なんです。また、能には夢幻能と現在能っていうのがあって、夢幻能は、死んだ人(シテ)がその土地とかに縁のある人の姿をかりて出てきたあとに本体で出てくる。なんでもかき姿で出てくんの、っていうたら、思いが残ってるんですよ。成仏できない。だから成仏さしてくれ、っていう魂の救済を求めて出てくるんです。だからシテの相手役のワキっていうのはお坊さんの場合が多い。

世阿弥の曲の多くは西行がワキとして出てきて、シテの話は聞くっていう構図をとってますよね。シテの話が出ましたが、味方さんが演じる際に気をつけておられること、能における一種の死者性とい

↓ 能の動きや空間性について  
 実演しつつ語ってくださる味方さん



能に関わられるようになったきっかけというのはどういふものなんですか？

格好のいいことは全く言えなくて結局は世襲やっただけですね。ただ、もともと父はこの世界の人間じゃなかったんです。父が素人から玄人になって、僕と兄は一応玄人の子なんですけども、世襲とはいえず、まだ僕で二代目になります。勿論今までが順風満帆だったわけでは決まらなかったのですが、簡単に言ってしまうと、親の引いたレールに乗ったということですね。

どこかで「この道で行くんだ」という主体的な選択の瞬間があったとは思いますが、その瞬間っていつの瞬間だったんですか？

少年期や青年期というのは、どこでもそうなんですけども、舞台を最優先させられるわけですよ。申し合せというリハーサルがあつて、やっばいそれが無いと本番というのはむかえられないわけなので、遠足の日でも休まされる。そういう状況が非常に嫌でした。けれども、あるとき親父に一言、「お前、やめて何すんねん」と言われたんです。それを考えてみると、確かに勉強ができるわけでもない。運動も人並み程度にはできますけども、オリンピックに行くような肉体も根性もない、別に手が器用なわけではないし、絵が描けるわけでもない。何かが好きか、っていうのははっきりしない。親父からしたら、この世界より勝っているもんがあるのか、ってことですよ。ということは、なるほど、十代でも板の上にあがついたら、他の人よりは秀でている

能は室町時代に始まった芸能ですが、同じ形をずっと継承していったわけではないんです。

その時代に合った演出とか、演技方法というのが時代と一緒に変わっていったんですね。なので、その根底覆すような変え方はいかんと思っただけでも、少しずつこの時代に合った演出方法というのを取り入れていかなあかんねやろなって思います。能が世界無形遺産に選ばれた、って喜ぶ人がたくさんいますが、遺産になったらあかんんです。鼓の偉い先生も言うてはる事なんですけども、能を博物館に入れたらあかんんです。能はまだ生き続けている。でも今の人が迎合するんじゃない。ただ、お客さんが入りやすい間口をつくらせてみるとか、お客さんがまたぎやすい敷居の高さにしてあげることが必要だと思えます。最近では海外公演や、学校などのワークショップも増えてきました。外国でやれば、物珍しいのでウケるのは当たり前。でも能は日本の文化ですよ。だから逆輸入でもいいから、日本の若い世代に見て欲しいなって思います。そういう意味で、ワークショップも良い機会だと捉えています。でもなにより、今、大勢の日本人は、受動的な生活に慣れすぎていますし、自国の文化を知らなすぎます。まずは食わず嫌いで、咀嚼をして飲み込んで、嫌なら戻せばいいんです。せひ、もう一步を踏み込んで、能を見に来てほしいですね。

ものがあるねんな、というふうに見えるんです。そのときに、この世界でやっていくんやろな、と思いました。

能楽師として活動されている味方さんから見て、能の魅力っていつの瞬間にあると思いますか？

そうですね。他の芸能でもそうかもしれないんですけど、何も無いところから何かを生み出すこと。例えば縛りがありないうちで、能でもともと四方吹き抜けの屋外でやっていた芸能で、舞台装置がいらないうちで、ものすごくベタな話をするよね、能舞台の上には松竹梅がある、っていうんです。舞台上にはわかりやすく松と竹があるでしょ。じゃあ、梅は？

……演者、ということでしょうか？

そうそう。世阿弥という人は何でも花に例えた人なんです。だから、花は舞台上で役者が咲かせたらいいんですよ。描いてないだけ。えらそうない回しですけど、本当はこんな松もいらぬ、竹もいらぬんです。四方吹き抜けがいい。結局は屋外で生まれた芸能なので、屋外の日がちょっとかげつてきたぐらいに能面とか能装束の一番の魅力が最大限に引き出されるんですよ。だから、何もいらぬというのそういう意味です。舞台装置とかそんなもの無くたってできる芸能なんです。唯一あつてほしいのは、受信するアンテナが見てる人にあること。みんなはアンテナ持ってるんですけど、アンテナ出さないとだめなんです。わかなくていいから出してほしい。じゃあどう見るとかかって、見なくてもいい。感じて

味方團 みかたまどか

京都市出身 1969年10月17日 生まれ。

能楽堂での演能を勤めながら、寺院の座敷・ホテルのバーやディナーショーなど場所に捉われず、意欲的に色々な演能スタイルに挑戦している。映画「魔界転生」(深作欣二監督/1982)やTVドラマ「失楽園」(加藤彰監督/1997)の劇中能にも出演。1995年には名古屋の若手能楽師と共に「能楽 鏡座」を結成、2004年には第8回公演「道成寺」にて名古屋市民芸術祭賞を受賞する。岐阜大学、京都女子大学などで教えるほか、社中の会「味方團青嶺会」を主宰するなど、精力的な活動を続けている。



身体や精神、生と死をテーマに制作する美術家、伊東宣明さん

そのテーマはどこから来て、そしてどこへ向かうのか



↑『生きている/生きていない』2012~2013 自分の心音を聞き、肉をたたいて心音を再現する作品

伊東さんがどうして作家になられたか、またドキュメンタリー的な制作方法とか、インスタレーションなどメディアをばない作家として活動していることと決められたのか、というのをまずお伺いしてもいいですか。

だいたい昔話を振り返る形になるんですけどいいですか。まず、僕自身が何も出来ない少年だったんですよ。何も出来なかった。何も(笑)。本当にどうしようもなく。生まれから体も小さくて、スポーツもダメ。おまけにずっと耳鼻科に通ってたんですよ。難病じゃないんですけど、毎週耳鼻科に通わないと中耳炎になっちゃう。で、耳鼻科いくと耳とか鼻の内部写真がよく飾られて、それに興味があった。あと母親の家系が馬専門の獣医やったから、母の実家に行くと馬を見せられて、祖父がカエルの解剖をしてくれたり。身体とかそういうものにはおのずと興味があった。小っちゃい頃は医者になりたかったんです。耳鼻科通ってたから、自分と同じような、耳鼻科になりたいって。でも残念なことに学力面もバツしなかった。割と変な子だったみたいで「エニクな子」として育ったんです。こういうところが制作やテーマのベースにあると思います。あと、中学の時にサッカー部入ったんですよ。ところがまあ、まるっきり上手くないし、一年でやめちゃって。で、辞めて何をしたらかっていうと、同じように部活落ちこぼれた連中で、美術室でキャッチボールしてたんです。

キャッチボールですか(笑)。キャッチボール。新聞紙とか丸めてテープで止めてボールみたいにして。別に美術室でやる必要もないんですけど、美術の先生はそれを咎めなかったんです。ある時、その先生が絵描いてみるかって言って、クレパスとリントを渡されたんですよ。これが十四歳のとき。それで描いてみたらこれ、意外と上手くいって。すごく楽しいっていう高揚感と、没入して自分自身がなくなっていく感覚。面白かったっていうよりも強烈な体験みたいな感じ。その時になんかこう、「俺は画家になるんだ」って思っちゃった。ちなみに、個が無くなるっていう感覚と高揚感は今でも制作でありますね。それで高校は奈良の公立の美術科に行っちゃった。親は最初反対してた。反対とか、ちよと待てと(笑)。なんかお前それ大丈夫か、って。ただそのときに写生大会かなんかで絵を描いてそれ見せたら、周囲よりぶっちぎりに上手く。親もそれを見て「あっ、ええんちゃうんかなあ」って許してくれたんです。そのときから、結果を示せば人は理解してくれるっていうのを感じましたね。で、美術科に三年間行ってる間は油絵を描いてました。ずっと自由に描いてたんですけど、大学入試の受験絵画ってありますよね。

## 美術家

# 伊東宣明

### いとうのぶあき

ほとんどそれとの相性が見事に合わなかったんです。全然もうダメ。それで高校を出てから東京の予備校で浪人をしてました。そこでサボって展覧会見たりしたら、映像作品が面白かったんですよ。ビビロシティ・リストとかすごい感動して。映画もたくさん見るようになりました。そうやって映像のほうにも興味をもったところで、京都造形芸術大学で先生をしておられる伊藤高志さんの「SPACE」っていう作品をすごいなって思ったんです。それで京都造形大の映像コースに行くことにしたんです。そこで「ホラー映画」を研究したことも後のテーマに影響を与えたと思います。叫んだり、痛いと思わせたり、身体との接続が多いんですよ。ホラー映画って。観終わったら「生きててなにより」って思っちゃった。

「描きたい」という気持ちから制作に入られたんだと、「現代美術」というジャンルやメディアを選ばない手法に対して抵抗感を持たれる人もいますよね。伊東さんにはそういう抵抗感は元からあまり無かった...? 無いですね。ひとつは高校時代に小説書いたことも大きいと思います。結局登りたい山みたいなものがあるとすれば、目標があればバスで行こうが徒歩で行こうが飛行機で行こうが、結果は一緒。いまは便利だから映像使ってるっていうのが大きいけど、映像作家として見られることに危機感持ってます。



←『死者/生者』2009~2010 祖母へのインタビューとその最期を記録した映像、作家自身が祖母の言動をなぞる映像の二画面で構成された作品

やりたいことっていうのが自分の中でカッチリ決まってるんですね。

そうですね。現在、身体・精神・生と死という三つの大きなテーマを抱えて制作して、だいたいそれに引かれるように制作しています。でも基本的にはその時々が一番の関心ごとについて制作しようと思っています。テーマ自体も、まず身体のある作品があって、精神、生と死という順番で移ってきました。今はそれらが複合、混合したものが多いです。最初のうちはわりと自分の身体を確認するような作品が多かったんですけど、身体をつくるってよくと精神面みたいなものを感じるわけですよ。身体が箱みたいな感じなんです。そのあと、演じている演じていない・イメージをつくるつくりたくない、みたいなことを考えることが多くなりました。それである時、家族の死から、「死者・生者」っていう作品に取りかかったんです。そうやって身体・精神と呼応する形で「生と死」っていうテーマが生まれたんですけど、それを曖昧なままにしたくなかった。僕は死をテーマにしてみたいなことを言って、その現場にいないことってすごい不誠実に感じました。それでそのあと、葬儀屋に勤めるようになりまして。簡単にいうと、死を知るには、死体っていうものにちゃんと触らないとわからないんじゃないかって。でも、当たり前ですけど、死の現場みたいなことはわかりましたけど、死を知ることなんか出来なかったです。



↑『芸術家』2013 企業の新人研修の手法を用いて「芸術家」として洗脳するまでを描いたモキュメンタリー

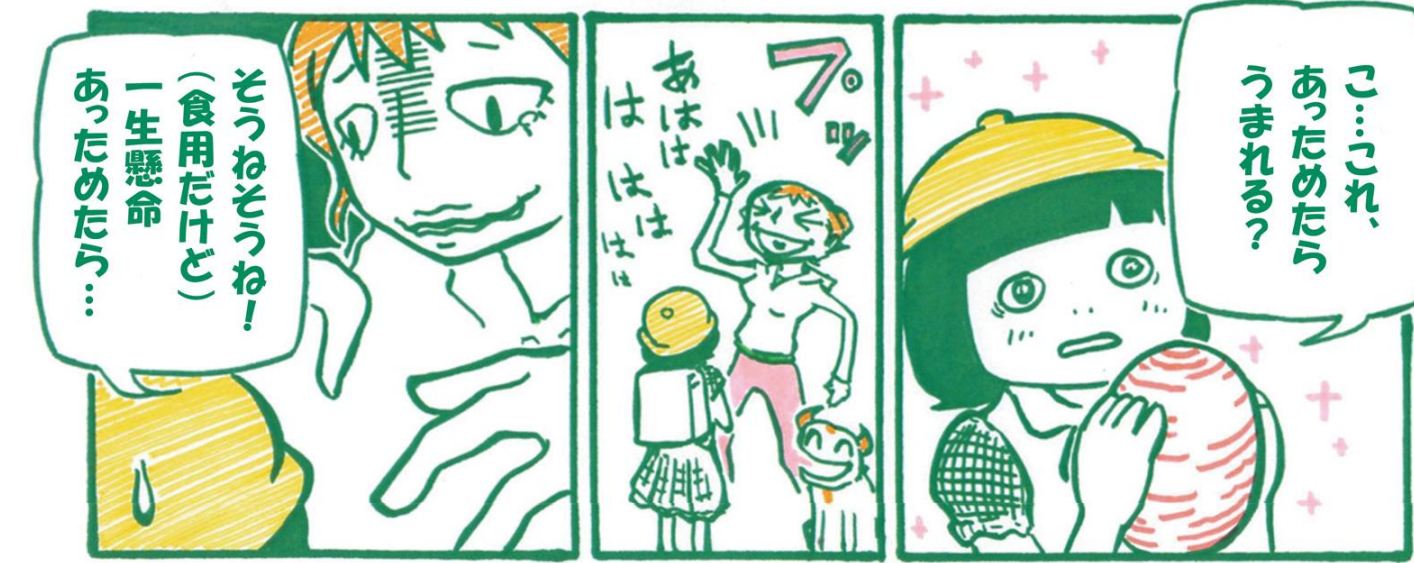


## 伊東宣明 いとうのぶあき

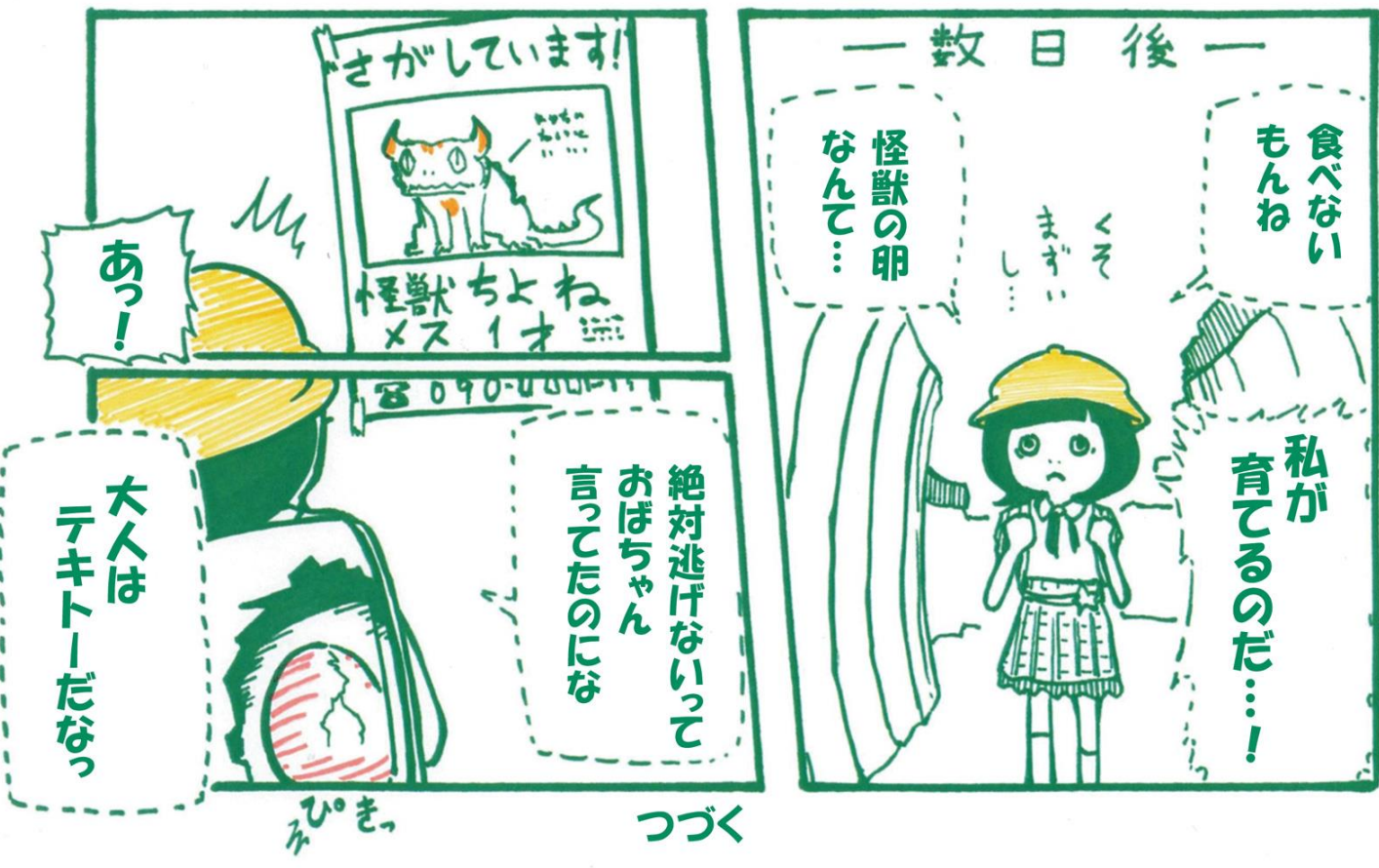
1981年 奈良生まれ。美術家。京都市立芸術大学大学院 絵画専攻(造形構想)修了。「身体」「生/死」「精神」という、生きるうえで避ける事のできない根源的なテーマを追求している。表現方法を特定せずに観客に強く「実感」させる方法を採用している。2010年サントリーミュージアム〈レゾナンス展〉、2012年京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 〈Me'tis -戦う美術-〉、2013年IAMAS 〈おおがきビエンナーレ2013〉等、他展示多数。

# 怪獣小学生えい子

アストロ温泉



怪獣 (O) (O) うまれるかも…



えい子ちゃん、後ろ後ろ〜！ 次号、生まれるよ

通年連載

# 開かれた場のための4つのレシピ

小山田 徹

美術家 / 京都市立芸術大学教授

初めまして、小山田徹と申します。

人々が多様に繋がる場と時間、共有空間の獲得の為の4つのレシピ。

「weekend café」「屋台・小屋」「焚火」「マルチハピタット」について、4回にわたり書かせて頂きます。

皆様とこの「生きにくき」世の「生きぬき」の方法を考える入り口の一つになればと思っています。

## Recipe.1 「weekend café」

90年初頭、私の周辺の友人達は、身近な友のHIV感染という告白を受け、大きな転換を迎えていた。AIDSを巡る様々な社会問題と対峙し、何よりも、自らに内在する偏見や差別的思考と退治するため様々な活動を始めていた。Art-Scapeと名づけられた一軒家を拠点に毎日50名を超える人々が入り出す場で様々な企画と活動が展開された。

しかし、活動が先鋭化すると、初めてそこを訪れる人々に敷居の高さが出来た、無言の無意識の圧力(あなたはジェンダーという言葉も知らないの?とか)が生まれていた。多くの人々に開かれた場だった所がいつの間にか限られた場になりつつあった。そこで、新たな入り口、開かれた場のアイデアが必要になり、皆で

### weekend café



京都大学の西に、寮に付属した古い洋館(ウォーリスという建築家作)があり、デッドスペースになっていた空間を、寮生達の協力の元、二週間に一度、週末土曜日にオールナイトの自主運営のカフェにした。布を机に掛けて簡単なカウンターを作り、お酒等はお向かいの酒屋さんから仕入れて原価端数切り上げで値段を決め、持ち込みOK但し持ち込んだ物はシェア。営業認可をとっていないので、ホームパーティーの延長として運営し、一応の値段はカンパという了解でおこなった。広報はしないので、口コミで、友達が友達を連れてくる感じ。古い洋館なので暖炉があり、火を入れると雰囲気抜群。カウンター業務はシンプルにし、終電を気にせず朝の始発がスタートするまでのオールナイト。こんな感じで8人ぐらいのメンバーで93年にスタートした。すぐに口コミ、友達ネットワークの広がり次第で多くの人々が集まり、AIDSの関連の人々だけではなく、京都大学の横という立地もあり、多様な分野の学生や教員、看護師などが集まり一晩に200人を超える人々が出入りするカフェとなった。その中で面白い発見が相次いだ。

皆さんは知り合いのいないパーティーで壁際に立ち、様子をうかがいながら落ち着かない時を過ごした経験はありますか? そんな時、目の前で誰かが飲み物をこぼしたりすると、思わず助けにいき片付けを手伝う。すると不思議とその場にいる理由がみえないものが立ち上がるような感じがある。労働が状況をかえてくれる。それと同様な事がweekend caféでもおこり、シンプルなカウンター営業のおかげで、カウンターのこちら側、マスターになりたがる人々が続出、交代でマスターになりサービスをしはじめた。結局ほとんどのお客がマスター経験者になり多くの人がスタッフの気分を持つに至った。すると不思議と準備や片付け、掃除、騒音配慮、駐輪整理、分煙などが何も言わなくとも行われ、自立的な運営がなされる様になったのである。当時はまだ携帯電話の普及率が低く、ほとんどだれもメールアドレスなど持っていなかった。なので、2週間に一度、様々な人々に出会えるこのカフェは皆にとって便利な場所だった。ほとんどニックネームしか知らない人々でもうまく関係が取れ、海外から来たゲストもこのカフェにつれて行くと、次の日からのアテンドや宿泊場所がみつかったりした。



同志社大学の近くで行われていたbazaar café project

この様な環境の中で、様々な活動が緩やかに始まり、連携していった。運営側と客側という二極に分かれるのではなく相対的に混ざる感じは、AIDSを巡る問題の中で直面した自己と他者の関係を実践的に考察するヒントとなった。この様な奇跡的なカフェの場と時間の創出は3年間ほど続いた。しかし、カフェの建物が歴史的建造物に指定され改修保存される事になり残念な事に使用出来なくなったのである。途端に皆困った。2週間に一度カフェに行けば会えた人々に急に会えなくなったのだ。連絡先も本名も知らない人とはなかなかコンタクトがとれなくなったのだ。いかに皆にとって便利な場所だったか。不便になって初めて場についての積極的な思考が始まり、その後、第二のコミュニティカフェ企画「bazaar café project」(同志社大学の近く)や吉田屋、柴洋などの個人営業の飲食店を核とした場の開き方、屋台や既存のカフェを利用した企画などに展開していった。あの時期、京都のweek-end caféでの共通体験は、関わった人々の手によって多様に展開し、未だに場の試みは続いている。

今回はRecipe.2「屋台・小屋」の話を。



### 小山田 徹 こやまだ とおる

美術家。風景収集狂舎主催。建築家。大工。現場監督。矢尻収集家。石収集家。洞窟探検家。地図製作家。すべて自称。歩く人。拾う人。現在、京都市立芸術大学教授。

1961年鹿児島に生まれ。京都市立芸術大学日本画科卒業。98年までパフォーマンスグループ「ダムタイプ」で舞台美術と舞台監督を担当。平行して「風景収集狂舎」の名で様々なコミュニティ、共有空間の開発を行ない現在に至る。近年、洞窟と出会い、洞窟探検グループ「Com-compass Caving Unit」メンバーとして活動中。大震災以降の女川での活動を元に出来た「対話工房」のメンバーでもある。

## 編集後記

みなさまに、美術家、河村啓生としてのエゴが詰まったフリーマガジン「ON THE EDGE」をお届けします。アートを含めこの時代に行われている様々な試み、思索を、人間の営みとして並列的に俯瞰することでこれから生きていくための新しいカッティングエッジが得られるものと信じています。

「当たり前」の価値観が時として人を縛り、生き難くさせることもある中で、生き方、考え方の多様性や可能性について、少しでも光を当てることができたら幸いです。

いましばらく、お付き合いください。

編集長/美術家 河村 啓生

## 河村 啓生 かわむら のりお

「生と死」について多角的に考察し表現することを目指す現代美術作家

中学高校は主に野球や地元河川の水質検査をして過ごし、大学にて演劇を経験した後、制作を始める。

ホスピスボランティア、福祉アルバイト、華人見習い、アトピー患者などの顔も持ち、

それら主体的な経験や社会との関わり方全てを制作の根本に据えて活動を行っている。

現在は「生と死」のアイコンとして蝶のイメージを多用した作品を国内外で発表する。

河村啓生HP : <http://noriokawamura.s2.weblife.me/index.html>

E-mail: [leaf\\_shaker\\_nk@hotmail.co.jp](mailto:leaf_shaker_nk@hotmail.co.jp)

## ロゴ、漫画制作 アストロ温泉

未来の世界の観光地「アストロ温泉」をテーマにオモチャや楽器や立体作品を発明し、パフォーマンスや展示をしたり、マンガを描いたりしています。

<https://www.facebook.com/ASTROONSEN>

<https://twitter.com/ASTROONSEN>

## Special Thanks

岡竹信さま、日名舞子さま、中三加子さま、山崎ゆきのさま  
取材、コンテンツ制作に協力くださったみなさま

## 次回予告

インタビュー特集

「摩擦熱! 社会との接点」

多様化する価値観の中で、ジャンルが先鋭化し、時として排他的にもなる現代。

とある分野が、「その他大勢」である社会と擦れ合うとき、そこでは何が起きているのか。

ジャンルを超えた多くの人によって実現される「天若湖アートプロジェクト」をはじめ、

福祉などの諸分野で活動する方々から特集します。

ON THE EDGE vol.1 発行日:2014/5/1 発行者:河村啓生

企画、編集:河村啓生 お問い合わせは[leaf\\_shaker\\_nk@hotmail.co.jp](mailto:leaf_shaker_nk@hotmail.co.jp) まで

ON THE EDGE



# 天若湖アートプロジェクト2014 あかりが繋ぐ記憶

2014/8/9(土),10(日)

京都府南丹市にある日吉ダムと天若湖  
かつてそこには、桂川と共に生きた集落がありました  
「あかりが繋ぐ記憶」は流域を潤す水になった村々の上に  
もう一度明かりをともしようというプロジェクトです  
上流と下流、現在と過去を未来へ繋ぐアートプロジェクトの節目  
10年目、10回目が始まります

天若湖アートプロジェクトHP



<http://amawakaap.exblog.jp>

Facebookページあります

## Butterfly room

河村 啓生 個展  
Norio KAWAMURA Exhibition

2014/6/24(Tue)~7/5(Sat) 12時~19時

日曜、最終日は~18時、月曜休廊

galerie 16

605-0021  
京都市東山区三条白川橋上ル  
石泉院町394 戸川ビル3F  
TEL 075-751-9238  
FAX 075-752-0798  
e-mail info@art16.net



・地下鉄東西線:「東山」1番出口北へ徒歩1分/市バス:「東山三条」より東へ徒歩2分  
Subway: To-zai Line [Higashiyama Stn.] Exit① / Buses: [Higashiyama Sanjo]  
3F Togawa Bldg. Sekisen in cho, Sanjo Shirakawabashi-Agaru, Higashiyama-ku, Kyoto 605-0021 Japan